

Title	18 恩師との出会い = 一〇年続けなさいという言葉
Author(s)	重村, 力, Shigemura, Tsutomu
Citation	学問への誘い - 大学で何を学ぶか -, 2014: 78-83
Date	2013-12-25
Type	Learning Material
Rights	publisher

## 恩師との出会い Ⅱ

### 一〇年続けなさいという言葉

重村 力

恩師吉阪隆正（早稲田大学教授のちに日本建築学会会長一九一七〜一九八〇）にはじめてお会いしたのは入学ガイダンスの時でした。吉阪学科主任は「入学した君たちは世界一を目指せ。建築でなくても、陸上でも、登山でもいい。」と言われました。A教授が次に「私はいまの発言に賛成しない。建築学科に入ったのだから建築でがんばりなさい。」と言いました。T教授が立って「このようにいろいろな意見があるところが大学です。正解は一つではない。」と言って大爆笑になりました。吉阪先生はもう一度登壇して、「陸上でも登山でも麻雀でも楽しめと言ったのではないのです。何かをやるからには世界一を目指して苦しめと言っているのです。」と言われました。吉阪先生は不思議な山羊ひげを生やした人物に見えましたが、大変心に残りました。

二年生の時です。設計実習のT Aの大学院生地井昭夫氏（のちに広島大学教授）が、クラス委員であった私のところに来て、昨年（六五年）大火で焼けた伊豆大島元町の復興計画を吉阪研究室でやっている。誰か大島にまで来て手伝う学生はいないかと聞かれました。「よーこんでぼくが仲間と行きます。」と答え、江ノ島から出ていた船で大島に向いました。大島では大学院生たちがまちの場所ごとのスケッチをしては図面に描き込んでゆく作業をしていて、とても心を魅かれました。私の役は役場の図面や統計の必要な部分を、端から描き写す退屈な作業です。コピー機や簡単なカメラがないのですべては書き写しました。まちのことや島のことを院生の先輩たちから聞き、建築の課題の相談にも乗ってもらって、島の生活は楽しいものですが、朝早くから夜遅くまでの書き写しで疲れ、ある日の夕方、大部屋の山積みされた、ふとんによりかかっていました。

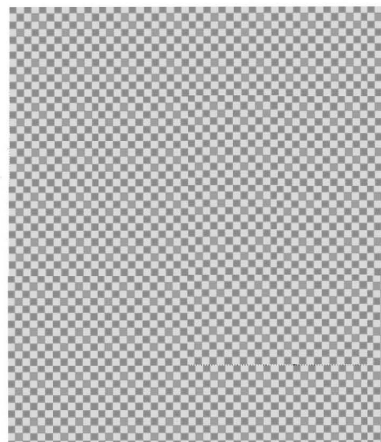
突然吉阪先生が島にやってきました。「さあどうなっていますか？ 計画は進みました

か」院生たちが集まって大部屋で会議が始まりました。自分は研究室のメンバーでもないと思ひ、漫画を読んでいました。すると吉阪先生が「君たちは誰だ。会議に参加しなさい。」と言われました。「僕たちは学部生です。」と答えると「だから参加しなさい。自分のやっていることがどんな役に立つのか、知ろうとは思いませんか？」と言われ、話の輪に加わりました。先生は計画の方向についてみなに意見を求め、私にも意見を求められました。「ぼくは手伝っているだけですから」と断ると、「手伝いながら何も見聞きしなかったのですか？ まちや島を見ていれば必ず感想や意見があるでしょう。それを話しなさい。」と言われて目が覚めました。「常に観察しながら考えていなければならぬ。」と教えられました。吉阪先生は会議の都度「意見がないと言うことは、私には肉体があっても、脳はありませんというのと同じだ」とおっしゃいました。先生は常に積極的に考え、意見を述べ、また意見を練ってゆく訓練をしてくれました。

吉阪先生は、哲学的に素晴らしい方だということはわかりました。ですが先生が世界的な建築家だということはわかりませんでした。吉阪先生の外見は何とも風変わりでも不恰好に見え、私は「建築家はしゃれているべきものだ」と思い込んでいました。ある日「あの先生もデザインをするのですか」と聞きました。先輩たちは私の顔をまじまじと見つめ「おまえそんなことも知らないで研究室の仕事を手伝っているのか」と言い、ある住宅の写真を見せてくれました。それはヴィラ・クックと呼ばれる先生の登山家仲間の仏文学者近藤さんの住宅でした。見てふるえました。世間の建築のように一切気取ってはいない。土をこねて出来た、地球の一部のように、自然の生命のような存在感がある。光り輝いていて、建築でありながら詩のように語りかけている。吉阪先生の内面を垣間見たような気がしました。三年生の時です。それから先生の作品をめぐるようになりました。

四年生の時大学院の先生のゼミに入ろうと思ひ、先生に作品を見てもらう機会を探しました。早朝は研究室で執筆をしている先生は、昼ごろになるとつかまらなくなり、夜ご自宅の前で待っていました。少しほろ酔いで帰って来た先生は、私をアトリエに入れ、図面やエスキスを次々に放るるように、見てくれました。一巡して、先生は「これも妥協している。これも批判が足りない」と次々に指摘されましたが、一枚の私のエスキスを見て、

「これには批判精神がある。誰にもない独創性がある。君はこれを一〇年続けなさい。」と言われました。そのエスキスをもとに、卒業設計をつくり、やがて全国学生デザイン賞をいただくことになりました。



大学院時代、沖縄が日本に復帰した（七二年）前後、沖縄北部の都市計画をしたことがあります。都市計画や交通計画や道路計画のどの本を読んでも、沖縄のように自然が豊かでかつ壊れやすく微妙で、また集落文化が豊かに土地に刻まれている場所で、どのように都市計画や道路計画・土地利用計画を立てるべきかわかりませんでした。自然をどう克服（征服）して道路をつくるかということや、経済優先の道路計画が書いてあっても、自然尊重・地域社会文化共存の道路計画は書いてないのです。吉阪先生は海外に行つてご不在でしたので、私は松井達夫先生という早大土木の都市計画（都市計画学会

長）の先生に聞きに行きました。松井先生は数項目の質問を丁寧に聞いてくださり、やがてゆっくりと「君の言う問題は私たちにも解けていない問題だ。だが君の問題意識は貴重です。君が問題に直面しているときに、一つ一つ丁寧に自力で解いて行つたらどうでしょう。お手本はないのです。」とおっしゃいました。「ああ、吉阪先生の言う一〇年続けなさいだな」と思いました。それからこの課題に没頭しました。ある日東大の日笠教授から電話がかかってきました。そして都市計画学会賞（七八年）をいただくことになりました。

（しげむら つとむ 工学部教授・建築学）